



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3153 号 2016.7.29 発行

### 社説 障害者と社会 どんな命も輝いている

毎日新聞 2016年7月29日

この世に生まれてきた命に価値のないものはない。理不尽な犯罪の犠牲になった障害者、あまりの悲劇にうちひしがれている家族のために、命の重さについて考えたい。

「どのような障害があっても一人一人は命を大切に、懸命に生きています。事件で無残にも奪われた一つ一つの命は、かけがえのない存在でした」

19人が死亡した相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件で、知的障害者の親たちがつくる「全国手をつなぐ育成会連合会」が声明文を発表した。障害者の家族や支援者の間で静かな共感が広がっている。

何をもって幸せと感じるのかは、その人固有の価値観に基づくもので、第三者が自分の考えに照らして幸不幸を判断できるようなものではない。重度の障害者を不幸だと決めつける人は、人間の尊厳に対する理解が不足しているのだろう。

「寝たきりの人をねらった」と植松聖容疑者は供述しているというが、寝たきりの障害者も人生を楽しんで生きようとしているのは私たちと一緒に。友だちや支援者との交流、美しい音楽、おいしい食べ物に顔を輝かせ、光や風といった自然にふれる瞬間に喜びを表す人もいる。つつましい日々の営みの中にも幸せはあるのだ。

そして、重度の障害を持つ彼らのことを誰よりも大事に思っている家族がいる。警察が被害者を匿名で発表していることもあって、彼らがどれだけ愛されて生きていたのか、どんな人生を歩いてきたのかを私たちは知らない。

その一方で、「障害者は不幸をつくることしかできない」などという植松容疑者の身勝手な主張ばかりが世間に流布されている。そんな状況に居たたまれなさを感じている人は多い。

「障害者は不幸をつくる」とは、障害者福祉に公的費用がかかり、ケアをする家族の負担が重いことを言っているのかもしれないが、あまりに一面的な見方だ。

障害者の日常生活のケアで疲れ、将来を不安に思っている家族はたしかに多い。しかし、それは社会的な無理解や偏見、福祉サービスの不足のために家族にばかり負担が掛かっているからでもある。

親が子どもに抱く愛情は障害の有無とはあまり関係がなく、むしろ障害があるからこそ強い愛情と信頼で結びついている親子もいる。重度の障害者から有形無形の恩恵を受けている家族がたくさんいることも知るべきだ。

どんな命も輝いている。もう一度、社会全体で確認したい。

### 社説：措置入院 退院後はどう関わるか

信濃毎日新聞 2016年7月29日

相模原市の障害者施設で多くの入所者が殺傷された事件で逮捕された26歳の男は、犯行の約5カ月前に異常な言動で措置入院させられていた。13日間で退院したが、その判断のあり方や退院後に関わるかが課題として浮かび上がっている。

措置入院は、精神疾患のため自分や他人を傷つける恐れがある人を、本人や家族の意思

とは関係なく、行政が強制的に入院させる制度だ。精神保健福祉法に基づく。

容疑者の男は、この施設で働いていた2月中旬、「重度障害者は安楽死させた方がいい」と同僚に発言。施設幹部の面談に対して「自分は間違っていない」と言い張った。地元警察の事情聴取にも「重度障害者の大量殺人は、日本国の指示があればいつでも実行する」と述べ、市に通報された。

措置入院は、移動の自由など人権を制限する。それだけに法は2人以上の精神保健指定医が診察し、精神障害で加害の恐れがあるとの結果が一致しなければならないなど厳格に要件を定めている。この結果に従って市は措置入院を決めた。

問題はその後の対応だ。

入院中の検査で大麻の陽性反応が出て、医師も影響を把握していたが、警察や県に情報提供しなかった。麻薬取締法が届け出義務を課す「麻薬中毒者」とは判断しなかったようだ。

それによって専門的な治療を受ける機会を失ったのではないか。疑問が残る判断だ。

入院時に比べ、退院の要件は緩い。法には診断する指定医の人数の規定がなく、1人の医師が加害の恐れがなくなったと判断すれば、退院させることができる。

入院の必要がないとの判断で「直（ただ）ちに退院させなければならない」と法が規定しているのは人権の配慮の上で大切なことだ。だが、退院後の生活や治療の指導、支援がないままでもいいだろうか。

家族らの同意による「医療保護入院」の場合は、退院時に病院管理者が精神保健福祉士らを生活環境相談員に選任し、本人や家族の相談に応じ、指導する義務を負う。地域での生活を支援する団体などを紹介する努力義務もある。

措置入院にはこうした規定がなく、市も退院後の容疑者をフォローしていなかった。これらが事件の遠因になっていないか。検証し、退院後の関わりを議論する必要がある。

「危ないから隔離しろ」という偏見を広げないようにすることも重要だ。

## 【主張】相模原大量殺人 なぜ実名発表を求めるか 産経新聞 2016年7月29日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入居者19人が刺殺された事件は、戦後最悪の凶行とされる。

元職員、植松聖容疑者は重度の障害者を標的に犯行に及んでおり、その残忍さ、卑劣さは際立っている。さらに異常なのは「重複障害者が生きていくのは不幸。不幸を減らすためにやった」とする、あまりに身勝手な供述である。

今年2月、衆院議長公邸に持参した手紙には「保護者の疲れきった表情、施設で働いている職員の生気の欠けた瞳」「障害者是不幸を作ることしかできません」といった記述もあった。

懸命に生きる障害者や見守る家族を、これほど侮辱する、腹立たしい犯行動機があるか。

知的障害者と家族などの団体「全国手をつなぐ育成会連合会」は障害者に向けて「私たち家族は全力でみなさんのことを守ります。ですから、安心して、堂々と生きてください」とメッセージを公表した。

そして、障害者の不安を軽減するためにも、誰よりも被害者の家族に、容疑者を強く否定してもらいたい。

怒りや悲しみ、被害者への愛情や思い出、容疑者への反論を直接聞き、伝えたい。そのための取材である。容疑者の供述や妄想に満ちた手紙の文面が、当事者に否定されることなく社会の記憶に残る事態は耐え難い。

神奈川県警はこの事件で、「実名報道が基本ということは承知している」とした上で、被害者氏名は非公表とした。「被害者が障害者であることと、ご遺族の意思」がその理由とされた。

だが、報道側が求めているのは実名報道ではなく、実名の開示である。実名は取材の起

点として不可欠なもので、実名を報道するか否かは取材の結果で決める。まず取材がなければ、真実へは一步も近づくことができない。

平成17年に個人情報保護法が施行されて以降、警察や関係省庁が被害者氏名を公表しない事例が増えている。だが同法は報道目的の情報提供は適用除外としており、同法を根拠とする被害者名の非公表は誤りである。

報じる側の集団的過熱取材（メディアスクラム）には強い批判がある。深く反省すべき点も多々ある。それでも、取材をやめるわけにはいかない。

## 障害者 みんな大切な命 読売新聞 2016年07月29日

◇ダウン症児育てる母「この子も意味を持って生まれてきた」

倫汰ちゃんの写真を手に、「誰でも生きている意味はある」と話す吉本さん（浜田市で）



神奈川県相模原市の知的障害者福祉施設で19人が刺殺された事件で、逮捕された男（26）が、社会には障害者が不要ないという旨の発言をしていたことがわかり、衝撃が広がっている。障害をもつ子どもを育てている県内の親たちが心を痛めている。（岡信雄）

「育児は大変だけど、倫汰がいるだけで幸せな気持ちになれる」。浜田市竹迫町の主婦吉本美和さん（42）は、ダウン症の三男、倫汰ちゃん（4）の成長の記録をブログにつづっている。

未熟児で誕生した倫汰ちゃんは、生後1か月半でダウン症と診断された。ミルクを吸い込む力が弱かった。「びっくりして、とにかくダウン症についてネットを検索した」。そこで、前向きに育児に取り組む多くの人たちを知り、「この子も意味を持って生まれてきたはず」と思うようになった。

兄（5）と同じ保育園に通う倫汰ちゃんは、「だめ」と注意されても意味がなかなか理解できない。ほかの子どもたちと同じように、感情を抑えられず、友達とけんかをすることもある。

それでも吉本さんは「倫ちゃんのニコニコした笑顔から、私は勇気もらっている」。27日夜、腹痛で苦しんでいるとおなかに手を当ててきて、「すりすり」をしてくれた。しぐさの一つひとつをいとおしく感じる。

相模原市の刺殺事件は、倫汰ちゃんのリハビリに通っている江津市の施設で知った。容疑者の供述内容を知り、「どうして障害者が生きている価値がないと思えるのか」と、強い憤りを感じた。ただ、知的障害者やその家族らでつくる全国組織が出したメッセージで、「障害のある人もない人も、私たちは一人ひとりが大切な存在です」という言葉に共感し、慰められた。

吉本さんは、浜田市内でダウン症の子どもを持つ親の会を結成した。同会のホームページがきっかけで今年4月、浜田市にダウン症の子どもたちの絵画教室が開設された。倫汰ちゃんも週2回、「ぺたぺた行く」と喜んでアトリエに行き、伸び伸びと絵を描いている。

吉本さんは、成長を記録した小冊子の写真集を作り、「Present 神様からの贈りもの」とタイトルを付け、大切にしている。吉本さんは言う。「ダウン症の子どもは確かに手がかかる。ただ、長男とはけんかばかりする次男も、倫汰には優しい。倫汰は周囲を楽しませるのが上手。かわいい子どもです」

◇県内623施設 防犯対策補助制度なし

県障がい福祉課によると、県は2006年、障害者自立支援法が施行されたことを機に、それまで知的、身体など障害ごとに受け入れていた専門施設をなくした。現在、あらゆる障害を持つ人が居住できる施設が29か所あり、14年9月時点での入所者は1333人。

29施設の定員は計1411人だが、今年5月末現在、25施設で延べ242人が空きを待っている状態という。

このほか、障害者が昼間だけ通う施設が140か所、障害者がともに暮らすグループホームが65か所、短期入所や児童向け施設など、障害者福祉施設は計623か所ある。

神奈川県相模原市の障害者福祉施設で起きた事件に関し、同課の担当者は「火災などの災害時の避難訓練は義務づけられているが、重度の障害者は自分で逃げることができないため、防犯態勢を強化するしかない」と話す。

ただ、国や県からの防犯面での経済的援助は、施設の新設や改修に関するものだけで、防犯カメラの設置など防犯に特化した補助制度はないという。

### 「障害者幸に見えない」 独善的思考背景か、相模原殺傷



共同通信 2016年7月29日  
顔を隠して津久井署に入る植松容疑者(右) = 27日午後  
相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され26人が負傷した事件で、元施設職員植松聖容疑者(26) = 殺人などの容疑で送検 = 「昔見た同級生が重い障害者で幸せに思えず、見ると嫌な気持ちになった。不幸だから障害者の面倒を見ようと思い施設で働いた」と供述していることが28日、捜査関係者への取材で分かった。  
「今は抹殺することが救う方法」とも供述。神奈川県警津久井署捜査本部は、こうした極めて独善的

な考えが事件の背景にあったとみている。

**障害者施設にメール送り業務妨害の疑い 男を逮捕** NHK ニュース 2016年7月29日  
相模原市の知的障害者施設で入所者などが刃物で刺されて死亡した事件に絡めて、横浜市の障害者支援施設の職員に危害を加えるという内容のメールを送ったとして、警察は34歳の無職の男を威力業務妨害の疑いで逮捕しました。

逮捕されたのは、横浜市磯子区の無職、島宗真之容疑者(34)です。

警察によりますと、島宗容疑者は27日、横浜市の障害者支援施設を名指しして、施設の職員に危害を加えるという内容のメールを送り、施設の業務を妨害した疑いがもたれています。

メールでは、この施設が相模原市の知的障害者施設で入所者などが刃物で刺されて死亡した事件で、逮捕された男と関係があるとしたうえで、「施設を破壊しに行く」などと記されていたということです。

このメールは横浜市内の別の施設に送られていて、地元の自治体を通じて警察に相談が寄せられたということです。

警察の調べに対し、容疑を認めているということです。

**相模原殺傷事件 障害者介護職が誓いの手紙** 東京新聞 2016年7月29日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で十九人が刺殺され二十六人が負傷した事件で、園に設けられた献花台には二十八日も、近くの住民や関係者らが相次いで訪れた。横浜市の障害者施設職員という男性は花束とともに手紙を供え、障害のある人も当たり前に生きられる社会の実現を誓った。障害者福祉の団体からも「共生」を呼び掛けるメッセージが出された。(神野光伸、柚木まり)

殺人などの疑いで送検された植松聖（さとし）容疑者（26）は、園の元職員だった。「障害者に対し、なぜもっと大きな気持ちに、優しい気持ちになれなかったのか」。男性は同じ障害者ケアに関わる者として、「温かく見守るべき立場の人間があまりに悲惨な事件を起こしてしまったことに、たまたまに頭を下げたいと思った」と話した。

手紙には、「日本の、そして世界の障がい者たちを優しく見守る人たちが一人でも多くなるように、間違った考え方を持った人たちを一人でも減らせるように」とつづった。「今回、被害に遭われた障害者の方々を守れなかったのは、社会全体の責任ではないか」と自問しているという。

男性は手紙の最後で「今回のような悲劇が二度と起きないように、努力を重ねていきます」と誓った。

相模原市緑区の介護士の男性（47）は、障害がある長男（16）ら家族四人で献花に訪れた。

「悲しくて涙が止まりません。わが子であれば、障害があってもいてくれることが幸せ」と話し、障害者への強い偏見をうかがわせる植松容疑者の言動に憤った。

男性の長男は、やまゆり園の関連施設に通っている。事件のことは何も話さないというが、自分と同じ障害のある人が被害者となったことは、気付いているようだという。

「みんなが弱い部分を持ち合わせて生きている。自分だけが中心にいるような考えは許せない」。男性は強い口調で語った。

皆さんを守れなかった私たちを赦してください。

相模原市の障害者施設殺傷事件で、現場となった「津久井やまゆり園」を二十八日に訪れた男性の手紙の全文は次の通り（原文のまま）。

遺された日本の、そして世界の障がい者たちのことを優しく見守る人たちが一人でも多くなるように、そして、間違った考え方を持った人たちを一人でも多く減らし、何より、かけがえのない皆さんの命が奪われてしまった、今回のような悲劇が二度と起きないように、努力を重ねていきますから、どうか、安らかに眠り下さい。

横浜市の一介護職員より

**障害者施設襲撃 犯人の標的となった人たちの思いを取材しました。**

FNN ニュース 2016年7月29日

神奈川・相模原市緑区の障害者施設で、45人が殺傷された事件。犯人の標的となった方々の思いを取材しました。

相模原市の障害者施設で、入所者19人を刺殺した植松 聖容疑者(26)が、「ヒトラーの思想が降りてきた」と語っていたことが、新たにわかった。

アドルフ・ヒトラーは、第2次世界大戦で、ナチス・ドイツを率いた独裁者。

その思想の特徴は、「理想郷の建国」。

そして、人種に優劣をつけ、優秀な遺伝子のみを残すという「優生思想」。

ナチスのユダヤ人虐殺は、広く知られているが、ほかにも、およそ20万人の知的障害、精神障害を持つドイツ人を殺害している。

さらに、ヒトラー自身は、国家や法よりも上に立つ存在だと定義していた。

この危険なヒトラーの思想が、2016年2月、「自分に降りてきた」と、植松容疑者は、病院の医師に話していたという。

さらに、このヒトラー思想は、以前、「津久井やまゆり園」に勤務していたころからあったという。

津久井やまゆり園の入倉 かおる園長は、「具体的に言いますと、『(障害者は)死んだ方がいい』というような発言をし始めておりました。『あなたは、以前からそういうことを考えてたのか?』と聞いたところ、『最近、急に思うようになった』と。『その考え方は、ドイツ・ナチスの考え方と同じだよ』ということをやったら、『そういうふうにとらえられても構わない』というような表現でした」と話した。

さらに、植松容疑者が友人に送った LINE でも、差別的な言動を繰り返していたことが明らかになった。

植松容疑者は、「生まれてから死ぬまで周りを不幸にする重複障害者は、果たして人間なのでしょうか」、「意思疎通ができなければ動物です」などと送っていた。

植松容疑者は、友人にも差別的な主張をして、意見を求めていた。

しかも、それだけではない。

地元の友人は、「3~4カ月前から、後輩に『一緒に殺害しないか』というのは持ちかけていたってというのは聞いたので」と語った。

友人に、「一緒に殺害しよう」と持ちかけていた。

誰もが信じられないような言動。

しかし、26日、植松容疑者は、自身が言うヒトラーの思想を行動に移した。

植松容疑者は、5人の職員を結束バンドで縛りつけたが、殺害した19人は、全員が重度障害の入所者だった。

施設に用意された献花台。

そこには、絶えることなく人が訪れていた。

献花に訪れた人は、「つらすぎて、悲しすぎて、何も言えません。涙が止まりません」と語った。

障害を持つ人たちに対する、植松容疑者のゆがんだ思い。

障害を持つ人の家族や、支援施設の職員らの思いは。

今回の事件で重傷を負い、今も入院中の森 真吾さんの母親・悦子さん(79)が、取材に答えてくれた。

16年前、津久井やまゆり園の運動会で撮影された写真。

悦子さんとともに、笑顔を見せる息子・真吾さん(51)への思いを話してくれた。

悦子さんは、「(2日前)本人は全然、意識もなかったんですけど、きょう行った時点では、人工呼吸器も外されて、わたしたちのことをわかってくれたと思うんですけどね。手を握ると、握り返すということもしてくれましたね。だから、早く回復してくれればいいなと思ってる」、「かわいいでしょ。親ばかだね。51歳になっても、小さな赤ちゃんと同じ。真吾と、これからもつきあっていきます」などと話した。

知的障害のある人と家族らによる団体の会長で、自身も障害のある息子を持つ、久保厚子会長は、「うちの息子も、言葉は全くありませんけれども、ちゃんと親子の間での気持ちは通じ合っていますし。冗談を言うと、『がはは』と笑ったりもしますので。(植松容疑者が)言っている中身は違いますよね」と語った。

東京・町田市にある障害者施設。

20年にわたって、障害者の支援の仕事をしているという早坂勇二さん。

プロとして、障害者に接する際の複雑な思いを吐露した早坂さんは、植松容疑者への憤りを隠せなかった。

小野路共働学舎・早坂勇二園長は、「(障害者に対する)負の感情って、多かれ少なかれ、あると思います。夜寝られなかったりとかっていうこともあれば、いらいらもするし。毎日、毎日、同じことをずっと言い続けても、それが改善されないで、イラッとして、ちょっと

大きい声出したりっていうことも、周りではあったりするし。大変だから殺すっていう考えは、どうしても納得できないですね」、「(植松容疑者は)身勝手としか思えないですね。どんな理由があろうと、やっぱり人の命を殺すということは、絶対あり得ないこと」などと語った。

全盲と、全ろうの重複障害を持つ、東京大学先端科学技術研究所センターの福島 智教授は、番組に対しメールを寄せ、今回の事件を「2重の意味での殺人だ」と語った。

福島教授は、「1は、人間の肉体的生命を奪う生物学的殺人。もう1つは、人間の尊厳や生存の意味そのものを優生思想によって否定するという、いわば『実存的殺人』です。障害者の尊厳というものが、特別に存在するわけではありません。あるのは、人間の尊厳であり、人間の生きる意味と権利です。そして、障害者はまさしく人間です」と語った。

身勝手な思想に染まった1人の男が奪ったもの。

人間の尊厳と権利とは何なのか、今、あらためて問い直されている。

### 障害者施設「破壊する」 脅迫メール送った疑いで男逮捕 朝日新聞 2016年7月29日

横浜市内の障害者支援施設を破壊し、職員に危害を加えるとする脅迫メールを送ったとして、神奈川県警都筑署は、同市の無職男(34)を威力業務妨害の疑いで逮捕し、29日発表した。容疑を認めているという。

署によると、男は27日午後10時半ごろ、横浜市磯子区内の就労支援施設に、同市都筑区茅ヶ崎中央の障害者支援施設を「破壊しに行きます」「施設の職員に危害(最悪の場合は抹殺も)を加えざるを得ません」などと脅すメールを送り、障害者支援施設の業務を妨害した疑いがある。

同施設は、自閉症などの知的障害者への就労支援を行う障害福祉サービス事業所。メールを受けて施設は28日午後、職員と利用者計12人を避難させたという。

### 【相模原19人刺殺】 犯行予告は安倍首相にも送付計画 植松容疑者、知人に手紙朗読

産経新聞 2016年7月29日



事件から3日目を迎えた「津久井やまゆり園」の正門前には献花台が設けられ、多くの人が手をあわせに訪れた = 28日午後、相模原市緑区(三尾郁恵撮影)

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入居者19人が刺殺された事件で、元職員の植松聖(さとし)容疑者(26) = 殺人容疑で送検 = が、障害者の大量殺害計画を記した手紙を安倍晋三首相にも提出しようとしていたことが28日、捜査関係者への取材で分かった。知人に朗読して内容を伝えており、断念するよう勧められた際は激しく抵抗したという。神奈川県警津久井署捜査本部は、差別意識を抱いた植松容疑者が自説を広く訴えようとしていたとみている。

捜査関係者によると、植松容疑者は1月ごろ、知人らに「障害者を殺したい」と相次いで連絡。重複障害者を多数殺害する計画と具体的手口をまとめたメモを読み上げ、安倍首相に送る考えを伝えた。だが主張を否定されると「考えが分からないのか」と激怒。最終的に送付は断念したというが、その後友人と連絡を絶っていた。

2月になり、植松容疑者は、障害者を大量殺害する計画などを記した衆院議長宛ての手紙を公邸に持参。この手紙の内容は1月に朗読していた計画と酷似していた。

捜査本部は自宅の家宅捜索で手紙の下書きとみられるメモを押収しており、関連を調べている。

家宅捜索では自宅から微量の植物片も見つかった。大麻の可能性があるとみて鑑定する。

植松容疑者は措置入院中、「ヒトラー思想が降りてきた」とし、「抹殺事件をきっかけに法律が変わればいい。世界経済のためになる」と話していたことも判明。取り調べには「昔

の同級生が障害者で幸せに思えなかった。不幸だから面倒を見ようと思い施設で働いた」とも供述している。

捜査本部によると、司法解剖で犠牲者全員の死因が判明。19人のうち17人は、首を切られたことによる失血死だった。

## 都知事選 障害者の望みは... 心のバリアフリー進めて 東京新聞 2016年7月29日

東京都内では六十四万人が障害者手帳を持つ。耳が聞こえない。目が見えない。でも、都知事選の候補者の言葉を聞き逃すまい、見逃すまいとしている。「私たちのために、どんな政策を用意しているのですか」と問い掛けながら。(都政取材班)

「障害者も人間として生きている。障害者なりの楽しみがある。『いなくなればいい』というのは、おかしい」。相模原市の障害者施設殺傷事件で逮捕された植松聖(さとし)容疑者(26)の差別に満ちた供述を知り、都聴覚障害者連盟の越智(おち)大輔事務局長(59)＝板橋区＝が憤る。

都知事選の最中に事件が起き、障害者の人権がクローズアップされた。「都には手話言語条例もない。私たちへの理解はまだまだ足りないんです」

安心して手話を使えるようにと、普及を目指す手話言語条例。都道府県では八県が制定したが、都にはない。連盟などが、連絡先の分かる都知事候補五人に条例制定の是非を問うアンケートを送ったら、答えたのは二人だけだった。

六歳の時に聴覚を失った。困るのは、買い物や外出先のトラブル時。筆談やジェスチャーで意思が通じるはずなのに、面倒くさそうにする健常者がいる。

「それが悲しい。障害者が暮らしやすいハード面の整備も必要だが、心のバリアフリーが必要。条例があれば、都民の認知度が違ってくるはずだ」

約二十年前、二歳だった次女が本棚の角に頭をぶつけ、耳から出血した。タクシーで病院に運んだが医師の説明が分からず、心配でならなかった。

今は救急車はメールで呼べるが、病院で医師と意思疎通ができない状況は変わらない。都は今年、都立施設などにタブレット端末を設置し、画面を通して手話通訳する事業を始めた。ただ、当面の設置場所は六カ所に限られ、対応も昼間だけ。「夜中は通訳が手配できない。すべての病院や交番に、二十四時間体制のシステムを広げてほしい」

障害者団体「きょうされん」の調査では、福祉施設に通う障害者の八割が年収百二十万円以下だ。日本障害者協議会の藤井克徳代表(67)＝小平市＝は「障害者の暮らしは、本人の我慢と家族の犠牲の上に成り立っている」と指摘する。

藤井さんは全盲で、通勤の際は娘や、職場の経費で頼んだ介助者が付き添ってくれた。「でも介助や支援がないため、就職を断念する障害者が少なくない」

都はかつて、重度障害者の作業所や障害児の学童保育の助成など、国に先駆けた施策を打ち出した。二〇〇〇年代に入ると、そうした支援は財政難などを理由に後退した。「国の制度からこぼれた人を助ける『すき間福祉』。それを、都知事が打ち出してほしい」

都政に望む障害者支援について、手話で語る越智大輔さん＝東京都渋谷区で(瀧沼義樹撮影)

